

隠喩的表現における面白さと三大理論の関係の検討

A study of relationship between humorousness and three major theories in metaphorical expressions

中村 太戯留[†]

Tagiru Nakamura

[†] 慶應義塾大学 / 東京工科大学

Keio University / Tokyo University of Technology

[†] tagiru@sfc.keio.ac.jp

Abstract

The three major theories of humor have been proposed. The superiority theory of humor suggested that a diminishment effect of some values is important in humor detection. The release theory of humor suggested that a feeling of “something released” is involved in humor detection. The incongruity resolution theory of humor suggested that the incongruity is resolved with positive emotion when a new relationship is found or when a mistake in the initial assumptions is noted. Nineteen university students were participated in this experiment, and judged whether or not the expression was humorous and contained above feelings. We found the main effect of “something released” and that of “finding new relationship.” Therefore, it is suggested that humor detection can involve these feelings.

Keywords — metaphorical expression, humor, superiority theory, release theory, incongruity resolution theory.

1. はじめに

ユーモアに関する理論は、優越理論、エネルギー理論、そして不調和解消理論に大別される [9, 1]。優越理論 [6] は、他人や過去の自分の劣る側面が明るみになることで、相対的に現在の自分が突然の栄光を享受する、という要因の重要性を指摘しており、見劣り効果 [15] の関与が報告されている。エネルギー理論 [13, 4] は、特に性的あるいは暴力的な余剰な神経エネルギーの放出、という要因の重要性を指摘している。不調和解消理論 [14, 3, 2] は、いつもと違う何か [3] や曖昧で不調和な何か [2] という不調和を、そのギャップを埋める新たな関係性を見いだしたり [10, 5]、思い込みの間違いを見いだしたり [7] して解消するという要因の重要性を指摘している。ただ、複数のユーモア理論の

位置づけを調査や実験に基づいて整理しようとする試みはほとんど見受けられないのが現状である [8]。本研究では、隠喩的表現 [11, 12] と小咄を用いて、これらの要因の関与を実証的に検討することを試みた。

2. 方法

実験参加者 19名（女性9名、男性10名、年齢：19-21才、出身地は関東）の大学生が実験に参加した。

刺激 隠喩的表現は“ A と掛けて、B と解く。その心は、X ”という形式の表現を用いた。刺激は、例えば、“ 女性の出会いと掛けて、新幹線の料金と解く。その心は、のぞみが高い ”というもので、16表現を用いた [11, 12]。小咄は、例えば、“ 芋屋の娘さん年とったねー ” 「うん、ふけたふけた ” というもので、Google 検索で探した 14 表現を用いた。

手続き 各刺激を提示し、次の質問に対する回答を選択してもらった。問1：面白いですか？選択肢：面白い、面白くない。問2：オチを読んだとき、前フリで登場したコトバの価値の低下を感じましたか？（価値の低下とは、例えば、偉人や名作などの一般に価値が高いと考えられているものが、くだらなく感じられるようになること。権威が失墜する感じ）選択肢：「A」が低下した、「B」が低下した、特に低下は感じなかった。問3：オチを読んだとき、登場するコトバ間に新たな関係性の発見はありましたか？選択肢：音の類似性を見出した、意味の類似性を見出した、特に関係性は見出せなかった。問4：オチを読んだとき、何かが間違っている感じはありましたか？選択肢：前フリの内容に間違いを見出した、オチの内容に間違いを見出した、特に間違いは見出せなかった。問5：オチを読んだとき、それまで高ぶっていた緊張が解放され、何かが放出される感じはありましたか？選択肢：構えていた思いが肩透かしをくらう感じ（やられた）、密かに思ってたことやついでやっつけてしまいがちなことを代弁してくれた感じ（あるある）、権威に対する反発心を

満足させる感じ(反発心),特に放出される感じはなかった。また,年齢,性別,そして出身地を回答してもらった。所要時間は30分程度であった。

3. 結果

まず,全実験参加者のうち過半数が「面白い」と判定した表現を「面白い表現」,それ以外を「面白くない表現」とした。面白い表現は13個(内訳:隠喩8,小咄5),面白くない表現は17個(隠喩8,小咄9)であった。また,全実験参加者のうち「面白い」と判断した人数の割合を「面白さ度」とした(範囲:0.0-1.0)。

次に「面白いかどうか」(問1の回答)を従属変数,次の変数を個別に説明変数として分散分析を実施した。形式(隠喩,小咄)による有意差は認められなかった($F(1,18) = 1.770, n.s.$)。

価値の低下(問2:低下した,なし)による有意差が認められた($F(1,19.145) = 4.711, p < 0.05$)。面白さ度は順に0.35(標準偏差[SD]:0.477)と0.50($SD:0.501$)で,価値が低下した際は面白さも低下しており,優越理論[15]の予想とは逆の結果であった。

新たな関係性の発見(問3:音の類似性,意味の類似性,なし)による有意差が認められた($F(2,47.925) = 9.649, p < 0.001$)。Bonferroniの多重比較の結果,音と意味の差のみ,有意差は認められなかった。面白さ度は順に0.57($SD:0.497$),0.48($SD:0.501$),そして0.26($SD:0.439$)で,類似性を見いだした際には面白さが上昇しており,不調和解消理論[10,5]の予想を支持する結果であった。

間違いの発見(問4:間違いあり,なし)による有意差が認められた($F(1,22.972) = 5.470, p < 0.05$)。面白さ度は順に0.29($SD:0.456$)と0.47($SD:0.500$)で,間違いを見いだした際は面白さも低下しており,不調和解消理論[7]の予想とは逆の結果であった。

エネルギーの放出(問5:やられた,あるある,反発心,なし)による有意差が認められた($F(3,76.379) = 60.085, p < 0.001$)。Bonferroniの多重比較の結果,音と意味の差は認められなかった。「やられた」と「あるある」の差のみ,有意差は認められなかった。面白さ度は順に0.85($SD:0.358$),0.72($SD:0.540$),0.42($SD:0.497$),そして0.17($SD:0.373$)で,何らかの放出がある際には面白さが上昇しており,エネルギー理論[13,4]の予想を支持する結果であった。

4. 考察

「面白い表現」においては,新たな関係性を見出すことによって不調和を解消するという要因,および

何らかのエネルギーを放出するという要因が全体的に関与する可能性が示唆された。一方で,間違いを見いだしたり,優越感を感じたりという要因は,該当するケースがいくつかある程度にとどまっていた。

なお,実験参加者の出身地域,年代,時代背景を反映していることも考えられるため,これらの検討は今後の課題として挙げられる。

参考文献

- [1] 雨宮俊彦, (2016) 笑いとユーモアの心理学. ミネルヴァ書房.
- [2] Attardo, S., Hempelmann, C. F., & Di Maio, S, (2002) "Script oppositions and logical mechanisms: Modeling incongruities and their resolutions", *Humor*, Vol. 15, No. 1, pp. 3-46.
- [3] Forabosco, G., (1992) "Cognitive aspects of the humor process: The concept of incongruity", *Humor*, Vol. 5, No. 1, pp. 45-68.
- [4] Freud, S., (1905) "Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten" Fischer Taschenbuch-Verlag. (懸田克躬(訳) (1970). "機知: その無意識との関係" フロイト著作集4, pp. 237-421. 人文書院)
- [5] Hillson, T. R., & Martin, R. A., (1994) "What's so funny about that?: The domains interaction approach as a model of incongruity and resolution in humor", *Motivation and Emotion*, Vol. 18, No. 1, pp. 1-29.
- [6] Hobbes, T., (1840) "Human Nature", In W. Molesworth (Ed.), *The English Works of Thomas Hobbes of Malmesbury* (Vol. 4). London: Bohn.
- [7] Hurley, M. M., Dennett, D. C., & Adams, R. B., (2011) *Inside jokes: Using humor to reverse engineer the mind*. Cambridge MA: The MIT Press. (ヒトはなぜ笑うのか, 片岡宏仁訳, 勁草書房, 2015)
- [8] 伊藤大幸, (2007) "ユーモア経験に至る認知的・情動的過程に関する検討: 不適合理論における2つのモデルの統合へ向けて" *認知科学*, Vol. 14, No. 1, pp. 118-132.
- [9] Martin, R. A., (2007) *The psychology of humor: An integrative approach*. London: Elsevier Academic Press.
- [10] Mio, J. S., & Graesser, A. C., (1991) "Humor, Language, and Metaphor", *Metaphor and Symbolic Activity*, Vol. 6, No. 2, pp. 87-102.
- [11] 中村太戯留, 松井智子, & 内海彰, (2015) "隠喩的表現における面白さと見劣り効果の関係の検討" *日本認知科学会第32回大会予稿集*, pp. 620-621.
- [12] 中村太戯留, (2016) "隠喩的表現における面白さと間違い探しの関係の検討" *日本認知科学会第33回大会予稿集*, pp. 807-808.
- [13] Spencer, H., (1859) "The physiology of laughter", *Macmillan's Magazine*, Vol. 1, pp. 395-402.
- [14] Suls, J. M., (1972) "A two stage model for the appreciation of jokes and cartoons: An information processing analysis", In Goldstein, J. H., & McGhee, P. E. (Eds.), *The psychology of humor: Theoretical perspectives and empirical issues* (pp. 81-100), New York: Academic Press.
- [15] Wyer, R. S., & Collins, J. E., (1992) "A theory of humor elicitation", *Psychological Review*, Vol. 99, No. 4, pp. 663-688.